
隠された会話

李菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠された会話

【Nコード】

N5923A

【作者名】

李葉

【あらすじ】

「女の子の下着の色、何色がすきー？」快斗から俺と服部に突然の質問。一方別の場所では蘭と園子が…。

その日は日曜日、俺の家で自分の家のようにくつろぐ二人がいた。

「はーいっ♪新一と平次に質問タイム♪」

手を上げて、活気よく声を上げたのは黒羽快斗。

「何やねん改まって」

国際ニュースを見ていた服部平次は、声だけで快斗に答える。

「：どうせまたカレーライスとライスカレーの違いはとか言うんだろ」

俺はスポーツ新聞に目をやりながら、頭の中で別の記憶を引っ張りだし以前聞かれた質問を思い返した。そういえばあの質問には、服部もけっこう乗り気だったな。

「ぶっぶー！今回は〜調査なので〜す♪」

「調査？俺らのリサーチなんかしてどうすんねや」

目当てのニュースが終わったのか、服部はリモコンを手に取りTVの電源を切ると、快斗の方に体を向けた。

「お前何たくらんでんだよ」

そう言いながら、俺は一通り読み終えた新聞を机の上に置く。

快斗は、俺と服部の視線がじゅうぶんに自分に向いたのを満足気に確認すると、大袈裟に息をすうっと吸って言った。

「し・た・ぎ♪」

「「はあ？」」

服部と声が重なる。

「女の子の下着の色、何色がすきー？」

満面の笑み。

そんな顔で聞く事かよ。

「そんな俺らの趣味を快斗が聞いてどうすんねや」

服部が呆れ気味に言う。

「だーかーらー♪リサーチだって言ってるじゃん！」

快斗が大袈裟に両手を広げながら言う。

必要ねーだろ、その調査。

「まあ：あえて言うんやったら、俺は色より作りやな。シンプルなんがええわ。何やフリフリくっちゅうんは無理や」

「和葉ちゃんにはそういうのつけてほしいんだー♪」

すかさず快斗が突っ込む。

「はあ？俺と和葉はそんなちゃうわ。何言うてんねん！」

服部は手に持っていたままのリモコンを快斗に投げる。

おいおい…快斗じゃなかったらその行為危ねーぞ。

「俺はヒモのやつがいーなー♪」

服部の投げたリモコンをすっと軽くよけて、快斗が両手を合わせながら言う。

「え、紐で出来た下着なんてあんのか？それおかしくねーか？」

俺の言葉に快斗と服部が驚いたように目を向ける。

「工藤…お前ほんまにこういう方面はアホやなあ…」

「ヒモで出来た下着って…」

「それ下着ちゃうやんな」

「想像してみれば？蘭ちゃんのヒモの姿」

「エロ過ぎやろ」

服部と快斗がくっくつと笑いを堪えながら見合わせて言う。
んだよ、こいつら。

「…意味わかんねえ…」

「まあ、工藤はあのねーちゃんがつけてるもんなら何でもええんや

ろー」

「蘭ちゃんの下着ってどういうのなの？」

「…んな事お前らが知る必要ねーだろ」

見兼ねた俺はイスから腰を上げ、二階に続く階段を上る。
快斗の呼び止める声が聞こえたけど、知るか。

蘭の下着、か…。

毎回いっぱいっぱいで、いちいち見てる余裕なんてねーんだよ。

でも…言われてみれば気になるな。

次の時は、ちょっと意識してみるか。

「えっ？園子それ買うの？」

「あつたりまえよく！このくらいのものじゃなきゃ真さんの表情読み取れないもの」

蘭と園子がいるのは、渋谷109に入っているpeach john
という下着のお店。

日曜日なだけあって、店内はかなり混雑しているけど、さすがに彼女の付き添いで来た男の人は入りにくいようで、外の壁に背をかけ

て待っている。

園子が手に持っているのは、ホワイトと薄いイエローの色を基調に、レースとサテンの生地で作られたもの。所々に小さなリボンがあしらわれている。

あたしは園子の横で、ハンガーにかけられた下着の一つを手にとる。

「…新一というのが好きかなあ」

「工藤くん？そ〜ね〜…。そういう要望とか言わないの？」

「よっ、要望って？」

「だから、『蘭：俺、お前にこういうのつけてほしいんだよ』とか？とかとか？」

園子は新一の言葉の部分であからさまに口調を変えて、あたしを見る。

それと同時に、すぐ近くにいた女の子があたし達の方に視線を向ける。

「ちょっ、ちょっと園子〜！」

「で？どうなのよ？」

「新一は…そういうの言わない…けど」

「まあ、あの男は言わないわよねー。蘭っていつつものついているのよ？」

「いつもは…いろいろよ？で、でも…新一の時は、薄いピンクのものが多いかな…」

声のトーンを下げて言う。

「まあ、ピンクを嫌いな男はいないんじゃない？でもいつも似たような下着はダメよ！」

下着を見ていた園子があたしの方にくるつと振り向いて、勢いよく言う。

「どうして？」

「ばかねえ…。そういう時に普段とは違うものを身につけてこそ、男は更に気分が盛り上がるものなんだから！」

「そ、そうなの？」

「そうよ！あんたみたいなイメージの子が、脱いだら黒！赤！とかに男はくるんだから！」

「ええ…黒…赤?!無理よそんな色…」

「だったらこれは？」

園子は手に持ったそれを、あたしの目の前に出した。

『ありがとうございますた〜♪』

綺麗な店員さんからSHOP袋を受け取り、先に会計をすませた園子の方にかけていく。

「それなら絶対工藤くんもグッとくるわよ！」

「…そうかなあ」

あたしはSHOP袋に入った、買ったばかりのそれを思い返した。

新一、喜んでくれるといいなあ…。

『だったらこれは？』

『え？それって…』

『ヒモパンよヒモパン！ヒモパンを嫌いな男はまずいないわね！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5923a/>

隠された会話

2011年1月30日14時34分発行